

銃 剣 道 の 由 来

銃剣道の前身である銃剣術は明治建軍当時に採用するところとなったが、当時は剣術優位の中において、銃剣術の必要性を主張する勢力が胎動し、双方の真剣勝負によって銃剣術組の優勢が軍隊に銃剣術を採用するきっかけになったようである。銃剣術の採用を主張したのはフランス留学から帰国した斎藤徳明であり、剣術を主張したのが戊辰戦争の官軍側で活躍した山地元治であったといわれている。

当時の各鎮台(師団)において用いられた銃剣術は、わが国古来の槍術から創意されたものが多く、明治天皇が1880年5月に、陸軍戸山学校にご臨幸になった際に、同校の教官・助教が銃槍術を天覧に供したものは、木銃の長さが220cmで、使用した防具は槍術用のものであり、技術は長槍の「繰り突き技」が多用されたとの記録がある。引用された槍術流派は寶藏院流のほか、佐分利流・足田流・貫(管)流等が中心であったようである。

明治建軍当時は、わが国の軍制はフランスの制度を採り入れた関係もあり、1884年8月にフランス陸軍歩兵中尉ド・ビラレーと砲兵軍曹キュールの両名を剣術教官として招聘し、フランス式の剣術教育が始められた。当時は「バイヨネット」と呼ばれていた。

ド・ビラレー中尉は「日本式剣術教育は、爾今廃止し、フランス式剣術を教育すべきこと」を当時の陸軍卿西郷従道に進言して採用するところとなり、わが国独特の銃剣術は疎んじられるところとなった。しかし、フランス剣術はスポーツ的な考え主体をなしていたものであるから、実戦的な利用価値に欠けたところがあり、地方においては定着せず、陰では古来の槍術を中心とした銃剣術・剣術が根強く行われていた。

1887年(明治20年)にド・ビラレー、キュール両名が帰仏するに及んで、再びわが国の銃剣術が台頭し、1890年、陸軍戸山学校長大久保春野はフランス式を廃止して、日本式の銃剣術を復活するところとなった。

1892年11月には戸山学校体育科長の津田教修(津田一伝流の継承者)が、陸軍の剣術教範の改正にとりかかり、ここに日本本来の銃剣術が軍隊の制式科目に採用されたのである。

当時銃剣術に用いられた用語は次のようなものである。

- 「直 突」 銃剣の位置を替えることなく突く技
- 「脱 突」 少し右手を上げて剣先を下げて、剣先の交差を反対側に外して突く技
- 「切 突」 両手を上げ、相手の剣先の上部より突く技
- 「突 下」 剣先を下げて相手の下胴を突く技
- 「繰り突」 相手との間合いが遠い場合に、銃剣を左掌中を滑らせて突く技
- 「打撃・押圧」 相手の銃剣を打ち払い・除却して突きを容易にする技術

「隙 突」 相手が払い打った後の隙を据えた突き

「曷 突」 相手の数度の連続突きの際の空隙を突く技

「佯 突」 連続した突き技

これらが銃剣術の原点であった。

その後、1915年(大正4年)に大幅な銃剣術教則の改正が加えられ、1925年(大正14年)には大日本武徳会の独立科目として銃剣術が認められ、国民体育大会の前身的存在である、明治神宮大会には第1回大会から銃剣術として参加している。

銃剣道の名称は、1940年(昭和15年)月の檀原神宮武道大会から用いられ、翌年には大日本銃剣道振興会が創設され、「術」のみでなく精神要素の修行を加味した教育的武道への普及に努めたが、1945年の敗戦とともに銃剣道の禁止令が発せられた。